歴史文化を基軸にした内発的発展の契機となる参加手法について
―歴史街道「旅モニター」と「地域交流ワークショップ」―

Consideration on the Ways of Participation for People that can be the Opportunity for the Endogenous Development of the Region based on "History and culture"

○足立 久美子[1]・近藤 隆二郎[2]
Kumiko ADACHI・Ryujiro KONDO

ABSTRACT: Recently people seek for the endogenous development of the region to pursue the own living style due to the review toward the standardized regional development and ill effects caused by the centralization in Tokyo. Being the wisdom of the region, the history and culture draws out the indigenous characteristics of the region and acts as the key to regenerate the losing relation between people and the region, namely, they have the great possibility to trigger its endogenous development. However, discovering and recognizing their value in the relation with the regional environment is not popular enough yet, and it is necessary to establish the mechanism and ways of participation to have people accustomed to them and to rebuild the relation between people and them in order to attract public interest and develop people who can be responsible for specific efforts.

This research aims to discuss the way of participation that can be the opportunity for the endogenous development of the region through the examination of the effect and challenge of our two current ways, "travel monitors" and "workshops for regional exchange". We will also study various types of participation and exchange of visitors and region at projects by wide area cooperation.

KeyWords: endogenous development, history and culture, citizens' participation, visitor

1.はじめに

1.1 地域の内発的発展に果たす歴史文化の役割

昨今、歴史や文化をキーワードにした地域づくりが注目されている。その背景には、高度経済成長期以降進められてきた全国画一的な地域開発への反省と、東京一極集中による地域のひとや金の流出、文化や情報の枯渇化への危機感から、その地域にしかない生き方(＝地域戦略)を地域自らが考え実践していく姿勢が必然となった現状、つまりは地域における内発的発展が求められている動きがある。

歴史や文化を学術的な価値からやや広義にとらえると、地域環境や地域住民との関係性の中で再定置する視点が生じる。地域の歴史や文化は、その地域が積み重ねてきた知恵(wisdom)であり、地域が生きてきた軌跡であるととらえるならば、地域活性化や地域づくりの基軸として用いる可能性が広がる。すなわち、地域の歴史や文化は、地域固有の特性を発見する手がかりでもあり、人と人、人と自然、モノ、コト、時間(ムカシとミライ)など、見失われつつある人と地域のつながりを再生する手がかりでもある。

こうした歴史文化のもつ精神的価値や環境的価値が注目されたことで、伝建地区(伝統的建造物郡保存地区)の制度が生まれ、歴史的町並み保存運動が行われてきたわけだが、歴史文化の価値を地域環境との関係の中でとらえるアプローチはまだまだ一般化しておらず、広く市民の関心を高め、具体的な取り組みを担う人材の育成につなげていくためにも、歴史や文化を身近に親しみ、歴史文化環境と人とのつながりを再構築する仕組みと参加の方法が必要である。

1.2「歴史街道計画」について

「歴史街道計画」は、経済大国から生活大国、文化大国へのシフトチェンジが問題定義されてきた 80 年代後半、豊かな歴史文化資源を活かして関西の復興を促進することを目指し提唱されたもので、91 年に官民連携による協議会が設立された。具体的には図-1 が示すように、関西の歴史都市を時系列的にネットワークしたメインルートと 8 本のテーマルートを設定、新しい歴史の楽しみ方を提供していく旅のルートとして充実していこうというものである。事業目標は図-2 のとおりである。この 3 つの目標に沿って国、地方、経済団体、民間企業、市民がそれぞれ役割分担して事業を推進している。

「旅のルート」という言葉から観光振興的な側面が目立つが、「歴史街道計画」は、歴史文化をキーワードに、各

[1] 歴史街道推進協議会　Rekishi Kaido Promotional Council
[2] 滋賀県立大学環境科学部 Dept. of Environmental Planning, School of Environmental Science, The University of Shiga Prefecture

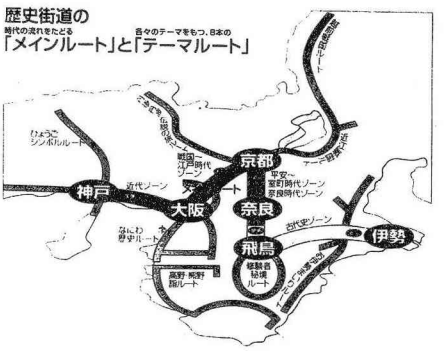

図-1 歴史街道ルート図

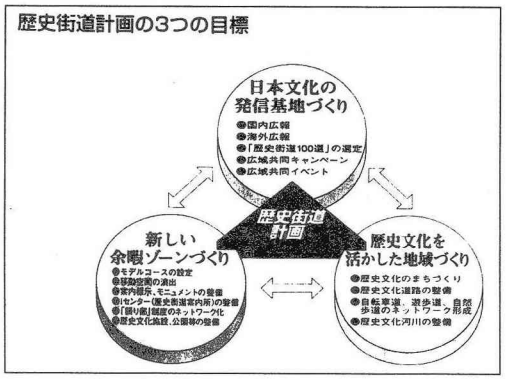

図-2 歴史街道事業目標図

地域のみならず広域連携によって関西全体のポテンシャルを高める、つまり内発的な発展を促進していく仕組みとしてとらえることができる。

「歴史街道計画」の事業目標である歴史文化を活かした地域づくりの具体的事業のひとつが、「歴史街道モデル事業」である。建設省と協力して進めているもので、来訪者にとっても地域に暮らす人々にとっても親しみとぬくもりのある地域づくりを、モデル地区を選定してソフト・ハード両面にわたって実施している。

このモデル事業を、前述した仕組みの中でとらえると、単なる地域整備事業ではなく、地域の内発的発展をサポートしていく試みとして位置づけることができる。その展開にはハコモノをつくれば達成できるといった従来の事業型の発想ではなく、継続的な運動体を中心とした発想が必要であり、市民参加を促進し、市民と行政がともに考え取り組んでいく漸進的プロセスを育む仕掛けが求められる。

本論で取り上げた「旅モニター」と「地域交流ワークショップ」は、このような問題意識から著者(足立)が考案したもので、とくに来訪者を参画させることで、地域(=住民、行政)と来訪者が刺激し合い、地域に埋もれている歴史や文化を掘り起こし、地域固有の特性を引き出し、磨きをかけていこうというねらいを持つものである(図-3)。

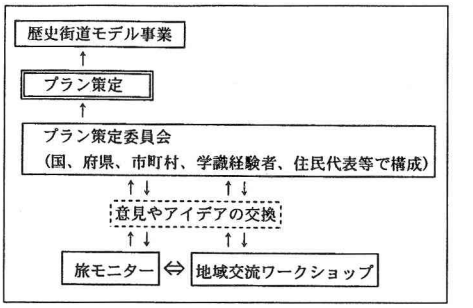

図-3「歴史街道モデル事業」と「旅モニター」「地域交流ワークショップ」の関係図

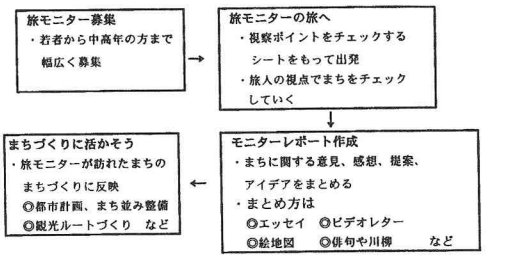

図-4「旅モニター」の仕組み

1.3 本研究の目的

本研究では、「歴史街道モデル事業」において試みてきた2つの参加実践方法について効果と課題を整理することを通じ、歴史文化を基軸とした、地域の内発的発展の契機となる参加の方法について検討することを目的とする。また、広域連携による事業展開(ここでは歴史街道計画)において、来訪者と地域の多様な参加と交流がもたらす内発的発展の可能性についても検討を加えたい。

2.「旅モニター」と「地域交流ワークショップ」における参加について

2.1「旅モニター」における参加

(1)「旅モニター」の概要

「旅モニター」は、来訪者の視点で地域をとらえ直し、再評価することが目的である。仕組みは図-4 の通り、平成 9 年度から歴史街道モデル事業計画策定地区に指定された市町村で実施している。

来訪者の視点に着目した理由としては、地域づくりが"内向きの論理"で語られる傾向があることから、地域の評価や資源掘り起こしにおいて、自己完結的な閉塞感に陥りやすいことがあげられる。来訪者の参画により、地域の既成概念の枠を外し、自由な発想による検討を試みることがねらいである。

(2)平成11年度歴史街道モデル事業プラン策定地区での実践

○旅モニター募集
1999年7月1日～31日
関西在住の社会人、学生より募集

▼

○旅モニター説明会
1999年8月1日：会場　京都テルサ
参加者への実施要項説明と担当地区の決定

▼

○旅モニター実施：視察
1999年8月中旬～9月中旬
視察ポイントをまとめたチェックシート（各地区自治体作成）に基づきモニターコースを設定
1泊2日の日程でスケジュールを組み、視察

▼

○旅モニターレポート作成、提出
締め切り　1999年10月6日
・チェックシート
・旅モニターマップ
・提案書

▼

○旅モニターレポート取りまとめ
各地区ごとに取りまとめ、モデル事業整備プラン策定に反映

図-5 平成11年度の事業プロセス

[1]概要と流れ

平成 11 年度については、兵庫県柏原町,生野町,京都府北丹後地区（網野,久美浜,弥栄,丹後）の3地区で実施した。参加した旅モニターは学生 16 名,社会人 8 名の計 24 名（男性 8 名,女性 16 名）。年齢は 20 代～ 60 代であった。事業の流れは図-5 に示すとおりである。

[2]「旅モニター提案書」(図-6)

モニター地区に関する感想や意見などに対して具体的な提案をまとめていくことが目的で、A4 2枚程度が目安、書式は自由でモニターの創意にまかせている。平成 11 年度については、「交流」「体験」をキーワードにした提案が各地区共に目立った。この結果は、昨今いわれている旅のニーズとも重なり興味深かったが、短期間での実施であったせいか、提案内容については、各地区ごとの差別化はあまりみられなかった。

観光客が"また来たい！"と思う柏原町まちづくりの提案

製作者：川辺幸枝・入江雅子
作成日：1999. 9. 30
モニター先：兵庫県柏原町

感想	提案
<良い所をもっとアピール>	
●おいしいものがある町	★日曜日に農作物や特産品の「とれとれ市」 ★この日、ここにこなければ求められない「限定品」を作る ★おいしいものを集めて実演販売したり、食べたり出来る柏原らしいお店
●自然豊かな町	★農業体験、貸し農園、ふるさと体験（夏休みなど、ふるさと留学）
●歴史や文化のある町	★町内の道を歩く人優先にして"歴史の散歩道""句碑の道""時計の道""お菓子の道""かやぶき家の道"など楽しいコースを作る ★柏原ならではの「親切な観光案内人」や「柏原めぐりツアー」を作る
<気づいた点を改善>	
●案内板が見にくい	★駅前の案内板の位置を駅の正面に移動する ★駅前の案内板にモデルコースを掲載
●観光マップに距離の目安がない	★薄くなっているものや不足しているものを書き足す（現在地、地名など） ★歩く距離や時間の目安を記入。トイレの位置も入れると便利！
●離れたポイントへ行く公共交通がない	★駅前にレンタサイクル（貸し自転車）を ★離れたポイント（年輪の里、悠遊の森、など）へ行くミニバス
●道が歩きにくい	★町内の細い道を速度制限したり、歩行者専用道路にする
●日曜日に閉まっている店が多い	★観光シーズンの土・日曜日に営業

図-6「旅モニター提案書」の例(柏原町)

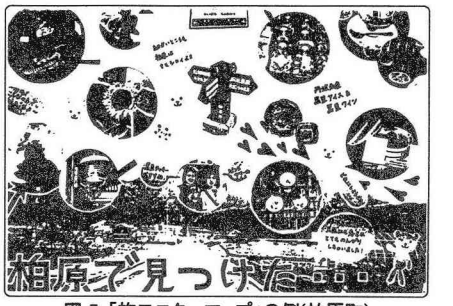

図-7「旅モニターマップ」の例(柏原町)

[3]「旅モニターマップ」(図-7)

モニター中魅力に感じたところ、気になったところやおもしろい発見のあったところなど、写真やイラストを活用して絵地図にまとめる。サイズは A3 、提案書同様モニターの創意にまかせている。感想、印象、問題点を地図に書き込むことによって、情報と地域のつながりをビジュアル的に把握でき、モニター自身の確認作業につながる。また、他者への伝達においても、「見てわかりやすい」ことから効果的なコミュニケーションツールとしての役割を果たすと思われる。平成 11 年度については、手書きだけでなくコンピューターを活用したものも多く見られた。内容も各個人の持ち味が発揮されて楽しかったが、観光案内用のマップづくりと勘違いしているものも若干みられたことから、モニターマップの目的を「旅モニター」に明確に伝えることが必要である。

[4]効果について

旅モニター実施後3地区の行政担当者に行ったアンケートによると、「以前から問題点として感じていた点を、モニターにより指摘されることで改善への想いを新たにした。」「単なる感想に終わらず、具体的な提案ということがありがたかった。」「歴史文化資源の活用の仕方など、来訪者の発想はユニークでプランづくりの参考にしていきたい。」という前向きな意見が多く、来訪者である旅モニターの参加が、プラン策定に向けての地域再評価の契機につながったと思われる。また、旅モニターからも「行ったまちで役に立つこと、帰ってきて自分のまちで役に立つこと、2つのためになる貴重な経験をした」といった感想も寄せられ、モニター自身にとっても他の地域について考えることで、大きな効果があったと思われる。

表-1 平成11年度モデル事業プラン策定地区での地域交流ワークショップの実施概要

WS 項目	柏原町 （兵庫県）	生野町 （兵庫県）	北丹後地区 （京都府）
テーマ	まちの今、これからを五感で考えよう ～住んで楽しい、行って楽しいまちづくり～	おすすめ生野旅ルートづくり	グル～ッとまわって北丹後
日時	平成１１年１１月２７日（土） １０：２０～１６：００	平成１１年１２月４日（土） １３：００～１７：００	平成１２年３月５日（日） ９：３０～１２：３０
場所	柏原町中央公民館	生野町就業改善センター	アミティ丹後
参加者数	４６名	４０名	５０名
参加者の属性	柏原町住民、行政 大字陀町住民、行政 旅モニター	生野町住民、行政 圃部町行政（平成１０年度ＷＳ実施） 旅モニター	網野、久美浜、弥栄、丹後、各町の住民、行政 旅モニター
内容	まち歩きの後「まちの魅力マップ」を作成。 柏原らしさを引き出しつつ、住民・旅人双方にとって魅力的なまちづくりについて考える。	歴史文化資源を掘り起こしつつ、それらをつなげて「おすすめ旅ルート」を考案。その際足りないものをピックアップ、モデル事業のプランづくりに反映させていく。	様々なまちの情報を、季節：春夏・秋、対象：主婦、高齢者、子どもを設定して、「かわら版」にまとめる。この作業を通じて４町ネットワークによる情報発信について考える。

2.2「地域交流ワークショップ」における参加

(1)「地域交流ワークショップ」の概要

旅モニター、地域住民、行政が具体的に意見交換しながら、来訪者と住民双方にとって親しみやすい「歴史文化を活かした地域づくりのイメージ」を描いていくことが目的である。方法としては、「地域と来訪者」「市民（＝住民、来訪者）と行政」「つくり手とつかい手」といった様々な関係性の中で自由に意見を述べ合い、それぞれの考え方、感じ方の違いを認識し合うことを目指すことから、水平な関係づくりを基本としてコミュニケーションをはかっていく効果的な手法、「ワークショップ」方式を活用している。

(2)平成11年度モデル事業プラン策定地区での実践

[1]概要について

平成 11 年度については「旅モニター」同様、兵庫県柏原町、生野町、京都府北丹後地区で実施した。概要については表-1 のとおりである。

[2]実施内容について

実施内容については、紙面の関係上、兵庫県生野町でのワークショップについてのみ紹介する(図-8)。生野町においては、歴史文化資源の掘り起こしと、それらを点としてではなく線として魅力的につなげていくことを模索するため、「おすすめ旅ルートづくり」(図-9)を共同作業として行った(図-10)。

[3]効果について

ワークショップを開催するにあたり、地元自治体と数回にわたって打ち合わせを行ったが、その時の反応は「ちょっと来たぐらいの来訪者に町の何がわかるか」といった否定的なものが多かった。実際、前述した「旅モニター」の報告についても一番淡泊な反応だったのが生野町であった。しかしながら、ワークショップ開催後参加者全員に実施したアンケートによると、「掘り出せばまだまだたくさんあるので、もっとこのような会をもち生野を再発見したい。」「もっとうずもれた古い出来事を知りたい。」「今まで生野を見直すことはなかったと想う。今後今日の日を一歩として、再び生野をよき町として発見する努力をしたい。」といった意見が特に地元住民から多く聞かれた。生野町ではこれがきっかけとなり、「地域交流ワークショップ」をモデル事業のプラン策定委員会とドッキングさせ、旅モニターも正式に策定委員となり、表-2 のような流れでプランづく

図-8 地域交流 WS in 生野町プログラム

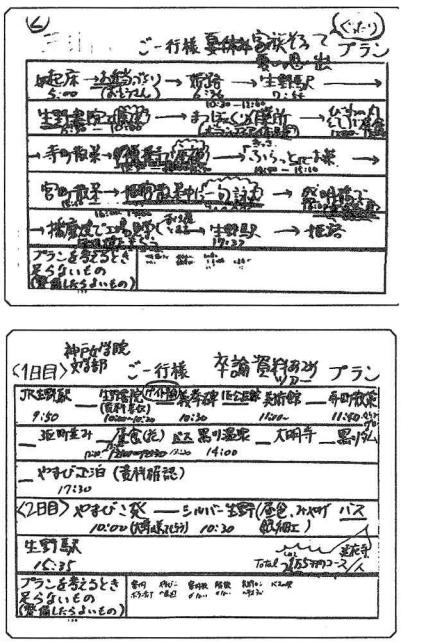

図-9 おすすめ旅ルートの例

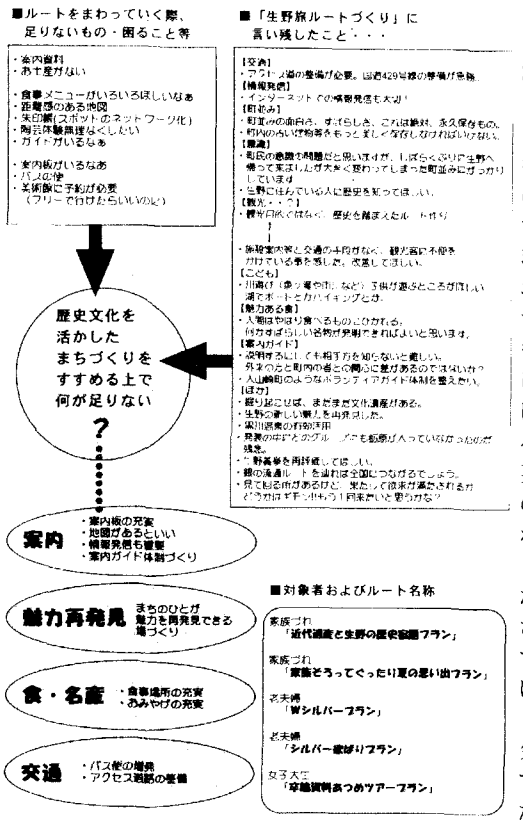

図-10 生野町地域交流ワークショップのまとめ

りが行われた。「地域交流ワークショップ」が地元の地域づくりに新たな動きを与えるきっかけになったと考えられる。「地域交流ワークショップ」は、継続していくことで地域の内発的発展の契機としての効果を高めていく参加の方法であるといえよう。

3. 地域の内発的発展の契機となる参加方法としての可能性と課題

3.1 2つの参加の方法についての評価と課題

地域にとって来訪者という「旅モニター」は、地域外の視点や発想をもたらすものであり、地域が無意識のうちに持っているものの見方、考え方を再確認したり、日常の中に埋没して気づかなかった地域の歴史や文化を再認識する機会としては効果的な方法であるといえる。ただし、現状では提案や意見が関係者の間でしかやりとりできておらず、今後は、広く地域の人たちに広報していく仕組みづくりが必要になってくる。また、その際どのような感想をもったのか、対応する地域の意見をキャッチボールのように吸い上げていくことも重要である。旅モニターについては、自分なりのものの見方、感じ方を積極的に提示できる人材の参加が望まれるが、かといって専門家である必要はない。むしろ相互に触発される中で、自分独自のものを自信で発見していく前向きな姿勢が必要であると思われる。

「地域交流ワークショップ」は、来訪者と地域の双方向なコミュニケーションといった点では、「旅モニター」よりはさらに効果的な方法であると考えられる。今回は生野町での内容を紹介するに止めたが、柏原町や北丹後地区における地域交流ワークショップにおいても生野町同様、「地域の歴史や文化を見直すよい機会になった」「あまり気にも留めていなかったことが、外の人に評価されることで輝いてみえてきた」といった感想が多く聞かれた。こうした効果は、ワークショップ手法を通じ、「旅ルートづくり」などの共同作業をしながら当事者同士が face to face で率直にやりとりできたことが大きく関係していると考えられる。

しかし、「旅モニター」同様「地域交流ワークショップ」も現状では地域計画づくりの一時的な市民参加手法という枠を出ておらず、地域の内発的発展の契機となるには、より多くの地域の人たちが参加できる機会と、参加者の

表-2 生野町モデル事業プラン策定の流れ

WS 項目	第１回地域交流ワークショップ ／プラン策定委員会	第２回地域交流ワークショップ ／プラン策定委員会	第３回地域交流ワークショップ ／プラン策定委員会
テーマ	生野旅ルートづくり	まちづくりの課題、旅ルートの検証をふまえ、まちづくりビジョン、整備プランたたき台を検討	整備プラン案実現のための方策・ソフト事業を検討するとともに、整備プラン案を現地で検証
日時	平成１１年１２月４日(土) １３：００～１７：００	平成１２年１月２９日(土) １３：００～１６：００	平成１２年３月１１日(土) １３：００～１６：００
参加者数	４０名	３０名	３０名
参加者の属性	生野町住民、行政 圏部町行政、建設省 旅モニター、歴史街道推進協議会	生野町住民、行政 旅モニター 建設省、歴史街道推進協議会	生野町住民、行政 旅モニター 建設省、歴史街道推進協議会
内容	１．歴史街道の説明 ２．旅モニターからの提案発表 圏部町からの助言 ３．生野の歴史を語る ４．旅ルートを考える	１．前回の確認 ２．整備プランたたき台の説明 ３．整備プランのグループ討議 ４．まちづくりビジョン(キャッチフレーズ)づくり	１．前回の確認 ２．前回意見をふまえた整備プラン案の説明 ３．整備プランの実現方策案並びにソフト事業案の説明 ４．まちづくりビジョン(キャッチフレーズ)の決定 ５．整備プラン案の現地検証(現地踏査→感想を出し合う)

地域再発見の喜びや地域への想いを一過性のものに終わらせないようにする、継続的な取り組みにつながる仕組みづくりが必要である。このためには、地域振興という切り口だけではなく、生涯学習や環境学習といった分野との連携も必要である。また、行政の支援のあり方も問われるだろう。つまり、縦割りの中で進められる事業型の支援では、どうしても事業の切れ目が縁の切れ目のようにならざるを得ず、継続的な活動の中で人の想いや意識を育んでいくことにはなじみにくい。人を育てるための画期的な支援策が望まれる。市民がマスタープランづくりに主体的にかかわる事例が増えつつあるように、歴史街道の事業にもより主体的に市民が関わるようになれば、来訪者としての市民と地域市民との関係が中心となり、行政および専門家はそのバックアップ(黒子)となり、事業に左右されない継続的な交流の仕組みが生まれる可能性が高まると思われる(図-11)。

いずれにしても、「旅モニター」は来訪者の視点という新鮮な情報を地域に向けて発信する方法であり、「地域交流ワークショップ」はその情報を受信した地域が、これを機にさらに具体的に来訪者や地域の人たちとコミュニケーションを深めていく方法である。この 2 つの参加の方法は、それぞれ単独ですすめるのではなく相互的にプログラムしていくことが効果的であると考えられる。

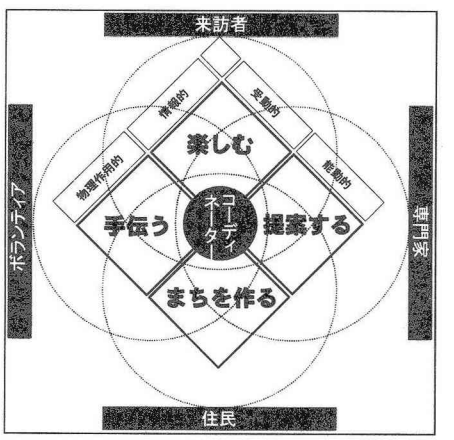

図-11 来訪者を取り入れた参加形態

3.2 参加方法の可能性と今後の展開にむけて

地域の歴史や文化を掘り起こしていく過程が、地域の人たちに地域への愛着と誇りを芽生えさせていく上で重要であることはよく言われている。「旅モニター」と「地域交流ワークショップ」はその過程に来訪者という地域外の主体を参画させることで、無関心あるいは逆に自画自賛や自己満足だけに終わらせず、再発見から新しい発想に基づいて地域をつくっていく内発的発展の契機となることをねらいとして実践してきた。地域の「気づき」という点では一定の効果があり、参加の方法としては評価できたと考えている。また、生野町で旅モニターがモデル事業のプラン策定委員として具体的に地域づくりに参画したように、地域と「旅モニター」の関係の仕方によっては、地域のファンづくりにつながり、そのことが地域の人たちの意識を前向きにしていき、さらに内発的発展へのはずみをつけていく可能性もある。

もちろんこのような参加をきっかけとして継続的に展開していくには、前述したように解決しなければならない課題も多い。しかしながら、こうした取り組みを各地域が単独で行うのではなく、連携して取り組んでいくことである程度可能性も広がるのではないだろうか。たとえば、「歴史街道」のような緩やかな広域連携組織がコーディネートすることで、地域間の交流を促進していくことも考えられる。各地域で実施されている歴史や文化を掘り起こす地域再発見イベントをネットワークしてお互いに来訪者として参加できるようにすれば、単独地域の自己完結的なイベントに終わらず、「地域交流ワークショップ」によってさらにコミュニケーションを深めれば、地域の歴史や文化と自分たちのつながりを再考したり、具体的なまちづくりアイデアや提案づくりにつながる可能性も出てくる。平成12年度「旅モニター」事業については、モデル事業プラン策定指定地区の人たちが旅モニターとして他の指定地区を視察する試みを実践している。このことによりどのような効果が生まれるのかを検討している。また、歴史や文化と地域や人のつながりを考えるリレーフォーラムを開催するなど、様々な参加と交流の機会を提供することで、人々の意識を高めていくことができるのではないだろうか。

4. おわりに

本研究では、「旅モニター」「地域交流ワークショップ」を通じて、地域の内発的発展の契機となりうる参加の方法について考察してきた。効果的な方法を考えるにあたっては、様々なものの見方、感じ方に多く触れるような交流とコミュニケーションの重要性があげられる。また、継続的に展開していくことも大切である。人と人、もっと言えば知恵と知恵が交流しながら、歴史文化環境と人々とのつながりを再構築し、新たな歴史文化の担い手を育てていく土壌をつくっていくことを目指して、引き続き具体的な実践を通じて研究を深めていきたいと想う。

謝辞:最後に、各地区での「旅モニター」「地域交流ワークショップ」に参加して下さったみなさん、実践にあたって助言や協力をして下さったみなさんに心から感謝いたします。

参考文献

1) 歴史街道推進協議会, まちづくり参加の一歩 vol.1, 同発行, 1998
2) 歴史街道推進協議会, まちづくり参加の一歩 vol.2, 同発行, 1999
3) 歴史街道推進協議会, 歴史街道地域交流ワークショップ記録集, 同発行, 2000
4) 鶴見和子, 内発的発展論, 東京大学出版社, 1989
5) 大河直躬, 都市の歴史とまちづくり, 学芸出版社, 1995